

北陸新幹線（敦賀・新大阪間）環境影響評価方法書に対する  
京都市環境影響評価審査会委員からの主な意見

資料3

令和2年1月15日に開催した令和元年度第4回京都市環境影響評価審査会での意見を下表に取りまとめた。

環境要素等		第4回審査会での主な意見
全般的事項	調査・予測・評価の手法について	○ 専門家に意見聴取されているが、主務省令に規定があるように、所属機関等について明らかにすべきである。
	その他	○ 今後、ルート及び調査地点を絞り込んだ時点で検討内容を公表し、準備書手続までに、幅広く意見を求めるなどの手続を自主的にとってほしい。検討いただきたい。 ○ 立坑の位置及び調査内容等が明らかになった段階で、調査前に意見を求める機会の確保を要望する。 ○ 法的には方法書で方法が決まるが、具体的な評価をするには地点が決まらなると妥当かわからない。詳細なルートが決まった時点で評価方法を見直してほしい。
大気環境	大気質	○ 方法書では、調査地点の数が具体的に明示されているものがあるが、立坑や換気施設の場所によっても調査地点等は変わる。大気や騒音については、適切な調査地域及び調査地点を選定していただきたい。 ○ 都市部の立坑については、将来的に換気設備にもなり得るが、騒音等の影響も懸念される。さらにトンネル出入口の衝撃騒音についても配慮されたい。
	騒音	
	振動	
	微気圧波	
	低周波音	
水環境	水質	○ 水質の調査項目について、酒造等の利用状況を考慮すると、方法書に記載の項目だけで良いのか疑問である。地下水は飲用や産業にも利用されており、口に入ることを考えると、より詳細な調査が必要ではないか。 ○ 広域流動を捉えた上で、必要な個所について精度を高めたシミュレーションを行うことが現実的である。 ○ 現段階でルートが決定されていないことを踏まえると三次元浸透流解析等の数値解析による評価は、作業の効率性の観点からも有用と考える。 ○ トンネル工事による地下水への影響として考えられるのは、まず、トンネルそのものから水が漏れてしまい水量が減ることであり、十分遮水性のある工法を採る必要がある。 ○ 山間部の水源は地下水流が限られている可能性があり、注意が必要であるため、水源や井戸利用者に関する情報収集が重要である。 ○ 間隔の広いボーリング調査だけでは、帯水層と帯水層の間の粘土層に水みちがある場合など上下方向の流動が把握できない。このような場合、ある帯水層を保全したつもりでも他の帯水層に影響が出てしまう場合がある。具体化に向けてはより密度の高い調査が必要である。
	水底の底質	
	地下水	
	水資源	

		第4回審査会での主な意見
土壌に係る環境 その他の環境	地形及び地質	(特になし)
	地盤	
	土壌	
	そ の 他	
動物	○ 斜坑の位置に関し、場所によっては、動植物や生態系に多大な影響を及ぼすことになる。猛禽類はもちろん、ヤマネ等の動物にも配慮して選定して欲しい。	
植物		
生態系		
景観	(特になし)	
人と自然との触れ合いの活動の場		
廃棄物等	○ 土砂の取扱いを非常に心配しているが、トンネル工事等で発生する土砂に関する記載がない。距離から試算すると、1坑口あたり、最大約150万m <sup>3</sup> の土砂の発生が想定される。 ○ 市街地で立坑等の工事が実施される場合、資材搬入や土砂搬出に大量の工事用車両が走行することで、周辺の道路の渋滞が懸念される。大気汚染や市民生活等への影響は当然のこと、渋滞の発生によるCO <sub>2</sub> 排出量も考慮されたい。	
温室効果ガス		